

それぞれの国には経済上の得意分野があります。その例として、「アメリカ」「日本」「韓国」の3国の経済特性とその得意分野を以下に述べます（六車流：流通理論）。

①アメリカ経済の得意分野

アメリカ経済は、フォードシステムを例とするように、大量生産システムが経済発展の基軸で、これが戦争に勝った基軸でもありました。経済力と軍事力を優位に展開できることにより、アメリカは覇権国家となりました。そのような経済背景の中で、**アメリカの経済的な得意分野は「発想力」と「システム力」に基づくビジネスモデルの創出力です。**

元々はアメリカも、初期・中期の経済の基軸はモノづくりでしたが、経済が成熟すると、より付加価値の高い産業でないと成立しなくなります。その後の近代から現代のアメリカは、「0」から「1」をつくる創造力に基づくビジネスモデルです。流通業界で言えば、多種多様な業態を創出し、かつ、1980年代の不況期にはバリュー志向の業態の続出、1990年代の好況期にはエンターテインメント志向の業態の続出、さらに2000年代には背伸び経済やバブリー消費志向の業態の続出があり、良い悪いは別にして、次から次へと「0」から「1」の業態を展開してきました。また、アメリカの経済は、IT技術に基づくネットワーク&コンテンツによるソフト産業です。特に、プラットフォーム理論によるシステムを構築し、知的所有権と高度なノウハウによって敵の参入を防ぐ手法に基づく産業は見事です。

②日本経済の得意分野

日本は、アメリカの大量生産システムの模倣から、戦後の経済は始まりました。**日本の経済的な得意分野は、職人技術に基づく「モノづくりの精度の高さ」と非資源国家に基づく「省エネ技術の高さ」です。**モノづくりはアメリカの模倣から始まりましたが、1980年代には技術的にはアメリカを上回り、モノづくり面でアメリカを窮地に陥れました（Japan as No.1）。また、第1次・第2次オイルショックの経験から、資源を持たない日本は、高度な省エネ技術を確立し、省エネ産業は現在も世界No.1の地位にあります。

③韓国経済の得意分野

韓国は、日本の産業の模倣から始まりました。そして、持ち前の勤勉さと負けん気で、1970年代から経済力を高めました（漢江の奇跡）。

韓国の経済的な得意分野は、国内マーケットが小さいがための「選択と集中による企業の存在性」と、財閥企業等の性格による「意思決定の速さ（スピード）」です。韓国は、人口が4,815万人とマーケット規模が小さいために、それぞれの業界で1企業のみマーケットを集中しました。それゆえに、国内での競争による消耗を少なくし、外国の大きなマーケットの中で堂々と戦える体制をつくりました。また、韓国の企業は伝統的にオーナー経営の財閥企業が多いため、投資や営業の意思決定のスピードが速いことが特色です。

このように、アメリカ、日本、韓国の3国はそれぞれ異なった特性を持っており、それぞれに長所・短所があり、どの国の手法が良いとは言えません。**ただ、この3つの国の経済の成長ベクトルとしては、日本が最も後れを取っています。**すなわち、アメリカの発想力やシステムによるビジネスモデルは山を越えたとはいえ、まだまだ健在です。韓国も、経済の特殊性を活かして大胆かつ積極的に成長ベクトルへ向かって行動しています。日本は、過去の成功の延長線上での前進であり、画期的かつ大胆な産業はなく、未だ行動ではなく模索中です。

(株)ダイナミックマーケティング社⁴
代 表 六 車 秀 之